

## 「義認の喜び(2)」

### 1. はじめに

(1) ここまでの「義認」についての議論(1:18~4:25)

- ①ユダヤ人も異邦人も、罪人である。
- ②ユダヤ人も異邦人も、信仰により、恵みによって救われる。

(2) きょうの箇所では、義認の後に何が起こるかという議論が展開される。

- ①過去の問題は、義認で解決した。
- ②将来に不安がある。さまざまな試練や苦難が待っている。
- ③義認の結果、信者に与えられた5つの祝福が列挙される。

### 2. メッセージのアウトライン

- (1) 神との平和(1節)
  - (2) 恵みへのアクセス(利用する権利)(2節a)
  - (3) 栄光の希望に関する誇り(2節b)
  - (4) 今の時の忍耐心(3~10節)
  - (5) 神に関する誇り(11節)
- 前回は、(1)~(3)を取り上げる。  
今回は、(4)~(5)を取り上げる。

### 3. メッセージのゴール

- (1) 初代教会に広がっていた患難に関する教え
- (2) 神に関する誇りの具体的内容

このメッセージは、義認を受けた者のその後の歩みを教えるものである。

## IV. 今の時の忍耐心(3~5節)

### 1. 3節a

「そればかりではなく、苦難をも誇りとします」(新共同訳)

- (1) 「カウカオマイ」という動詞
  - ①新改訳と口語訳は、「喜ぶ」と訳している。
- (2) 「そればかりではなく」の意味

- ①「神の栄光にあずかる希望」を誇るのは当然のことである。
- ②これは、聖化の完成、つまり栄化の希望のことである。
- ③義認の恵みを受けた者は、それ以上のことを誇りとしている。
- ④普通は誰もが嫌がる苦難(患難)をも誇りとしている。

(3) 患難の種類

- ①この世から来る憎しみ
- ②サタンの誘惑
- ③肉の思い
- ④神の御心による患難

2. 3節b~4節

「それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです」

(1) 患難を誇る理由が書かれている。

- ①患難は、私たちの内にキリストの似姿を作り出す原動力となる。

(2) 霊的公式

- ①患難+恵み=忍耐
- ②忍耐+恵み=練られた品性(練達)

\*ギリシア語の「ドキメイ」。金属を火で試し、品質を確かめること。

\*試された結果、純粹であることが証明されたもの。

\*神の承認がある品性という意味である。

- ③練られた品性+恵み=希望

\*神の承認があるので生まれる希望である。

3. 5節

「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです」

(1) 失望しない理由は、神の愛が注がれているという認識があるからである。

(2) この認識は、内住の聖霊を通して与えられる。

- ①信じた瞬間新生し、内住の聖霊を与えられている。

- ②ロマ8:9

「けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたが

たは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません」

③1 コリ 3:16

「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか」

④エレ 31:33

「彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——【主】の御告げ——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」

4. 感動的脱線 (6~10節)

(1) 6節

「私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました」

①「弱かったとき」とは、神に応答する力がなかったときという意味。

\*病人に使う言葉

\*道徳的な意味でも使える言葉

\*受動的な意味での罪人

②「定められた時」とは、あらかじめ決定されていた時という意味。

\*神の怒りが限界に達した時、神の怒りはキリストの上に注がれた。

③キリストは私たちのために死んでくださった。

(2) 7~9節

「正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです」

①「罪人であったとき」とは、神に敵対する者という意味。

\*能動的な意味での罪人

②敵のために死ぬ人はいない。

③正しい人のためでも死ぬ人はいない。

④情け深い人の場合は、そういう可能性もあり。感情に対するアピールがある。

⑤キリストの死は、常識ではありえないことである。

⑥それによって神は、私たちに対する愛を明らかにされた。

⑦ラビ的議論：大から小への議論

\*大を証明することによって、小が真理であることを示す。

\*罪人のために死ぬという愛が示された。これが大である。

\*義とされた私たちは、神の怒りか救われる。これが小である。

(3) 10 節

「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです」

①ここでも大から小への議論がある。

\*敵である者が、御子の死によって神と和解させられた。これが大である。

\*和解させられたのだから、キリストの内にあって救われる。少である。

②2 コリ 5:17~18

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました」

③コロ 3:4

「私たちのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現れます」

④「永遠の救い」を失う道はない。

## V. 神に関する誇り (11 節)

### 1. 11 節

「それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです」(新共同訳)

(1) 「そればかりでなく」は、3 節の「そればかりでなく」と並列関係にある。

①つまり、6~10 節の感動的脱線が終わったのである。

②その意味は、「神の栄光の望みを誇りとするだけでなく、患難さえも誇りとする。さらに、神ご自身を誇りとする」ということ。

(2) 誇りとする理由は、キリストを通して神と和解させられたから。

①それゆえ、キリストによって (あって) 誇るのである。

結論:

1. 初代教会に広がっていた患難に関する教え

(1) 公同書簡の教えと共通する。

①パウロ書簡と公同書簡がある。

(2) ヤコブとペテロ

①ヤコ1:2~4

「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります」

②1ペテ1:6~7

「そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまな試練の中で、悲しまなければならないのですが、あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れのとくに称賛と光栄と栄誉になることがわかります」

(3) 初代の教会の信者が受けていた教えの共通性

①信者にも試練が襲う。

②その試練は、信者を成長させ、完成させる力となる。

③それゆえ、信者は試練の中でも喜ぶことができる。

④さらに、試練そのものを喜ぶようになる。

⑤キーワードは、「恵み」である。

2. 神に関する誇りの具体的内容

(1) 神に関する誇りは、義認の結果である。

(2) 具体的内容

①神の存在を喜ぶ。

②神の性質を喜ぶ(義、聖、憐れみ、真実、愛)。

③神が自然界を支えておられる。

④罪人にはない感覚であり、体験である。